

第40期 日本語・日本文化研修コース（2020年10月～2021年9月）

許 明 子

1. はじめに

第40期日本語・日本文化研修生（以下、日研生）は8名である。2020年1月から新型コロナウイルス感染症が世界的に大流行し、第40期の研修生が来日を予定し

ていた時期は渡航手続きが困難を極めていた時期だった。結果的に7名の日研生は年末年始にかけて来日できたが、在籍大学から海外への渡航が許可されなかった1名は来日が叶わないまま研修期間が修了した。

第40期研修生の名簿は次の通りである。

第40期 日本語・日本文化研修生

名前	呼び方	国
GIDALE AJIT ASHOK	アジット	インド
MOHAMMAD ROMADHON	ドン	インドネシア
NUGRAHA DANI	ダニ	インドネシア
HUANG ZHIDIAN	コウ君	中国
PHAN HIEN THANH	ヒエン	ベトナム
FRANCU ANA MARIA ORTANSA	アナ	ルーマニア
PRAWIDHITYA VIERI	ヴィエリ	インドネシア
YAO YAPING	ヨウ ガヘイ	中国

来日してからもほとんどの授業がオンラインで実施され、教室に集まって活動を行う機会は落語会の文化体験、研究成果発表会のプレゼンテーション等、一部の活動に限られた。非常に制限が多い研修期間だったが、日本語及び専門科目の授業、研究論文作成及び研究成果発表会、文化体験等、多彩な研修活動を行い、成果を残すことができた。パンデミックという世界における新たな研修プログラムとして一石を投じるものであったと言える。各研修プログラムの内容の詳細について報告する。

2. 研修内容

第40期研修プログラムから、コース・コーディネーターが許明子に交代になり、研修内容も大幅に変更した。研修期間中に、日本語力の向上、専門科目の知識の学び、研究力の育成、の3つの目標を立てて、それらの目標が達成できるように研修プログラムを設計した。日本語能力の向上のために国際言語センターで開講している日本語の授業を履修し、専門知識を身に付けるために日研生専用の専門科目を履修した。さら

に、研究力を育成するためにレポートの作成及び研究成果発表会を行った。以下、研修内容の詳細について報告する。

(1) 日本語の授業

国際言語センターで開講している中上級レベル（NP7レベル）の技能別日本語クラスに参加し、他の留学生とインターアクションを通して日本語が学べるようにした。授業科目は日本語技能別授業と入門講義、学術日本語の三つのタイプの授業である。

〈技能別日本語クラス〉

月曜日（1限）：文法（宗林先生）

火曜日（1限）：作文（田中先生）

水曜日（1限）：会話（中川先生）

木曜日（1限）：読解（石川先生）

金曜日（1限）：聴解（宗林先生）

〈入門講義・学術日本語〉

月曜日（4限）：日本語学（李先生）

火曜日（4限）：日本語コミュニケーション論（許）

火曜日（5限）：日本文学（藤田先生）

木曜日（4限）：日本文化論（浮葉先生）
〈学術日本語〉

月曜日（5限）：学術日本語（加藤先生）

これらの授業には日研究生だけではなく、名古屋大学に在籍している外国人留学生も一緒に受講していることから、授業を通して様々な国の留学生と交流を行うことができた。

(2) 日本語・日本文化研修コース専門授業

日研究生8名を対象として日本語学、日本文化、日本社会の理解を深めるための専門科目を開講した。科目名、授業担当者は以下の通りである。

〈日研究生専門科目〉

月曜日（3限）：言語と人間・社会（永澤先生）

火曜日（3限）：日本文化とその変化（中川先生）

水曜日（3限）：日本論入門（香川先生）

木曜日（3限）：ニュースを通して考える日本社会
（石川先生）

金曜日（3限）：言語文化の多様性入門（呉先生）

また、学部日本語として開講された日本語口頭表現、日本語文章表現の授業を聴講し、学部生と一緒に学べる機会を設けた。

〈学部日本語〉

月曜日（2限）：口頭表現（佐藤先生）

水曜日（2限）：文章表現（許）

(3) 研究論文作成・研究成果発表会

研修期間中の研究成果をレポートとしてまとめ研究論文を執筆し、研究成果発表のプレゼンテーションを行った。日研究生のレポート作成はここ数年間中止されていたが、第40期から復活させ、各自が研究テーマを設けて先行研究の理解、資料収集・分析、考察を行う一連の研究活動を行った。大学における研究活動の経験がない研修生もいることから大学院生3名をTAとして採用し、レポート作成やプレゼンテーションの補助としてサポートを行った。

〈研究論文作成・成果発表プレゼンテーション補助
(TA)〉

人文学研究科博士後期課程（D3）：

末松大貴（金5）

人文学研究科博士後期課程（D2）：

西澤萌希（水5）

人文学研究科博士後期課程（D1）：

李 嘉隆（水5 or 金5）

第40期日研究生の研究テーマは日本語学、日本社会、日本文化、日本文学の多岐にわたっており、非常に高いレベルの研究発表を行うことができた。研究成果については2021年9月7日に対面とオンラインの両方で配信するハイフレックス型で実施した【資料1】。研究成果発表会のスケジュール、研究テーマの一覧は【資料2】の通りである。また、研修生のレポートはレポート集として刊行し、名古屋大学レポジトリにおいて公開している。【資料6】

(4) 文化体験

日研究生には研修プログラムを通して日本社会の理解、日本文化の体験による学習が期待されるが、コロナ禍の影響により日本文化を体験できる機会が限られていた。そこで、オンラインによる配信と教室における対面の方法を工夫しながら、2種類の文化体験を行った。

まず、一つ目は落語の体験である。日本伝統話芸である落語を通して日本語の楽しさを学び、小噺の創作及び落語家による落語を体験する機会を設けた。落語入門の当日は登龍亭幸福師匠をお招きし、小噺の発表会を行うとともに、落語会による落語の特別講座を開催した。落語会開催に関するアナウンスは【資料3】、落語入門当日の様子は【資料4】に掲載した。

二つ目の文化体験はオンラインによる狂言ワークショップである。狂言師による特別講座及び狂言の体験を実施した。研修生はZoomで参加し、狂言について概要説明、実演を鑑賞した後、各自が声を出して笑いや泣きを体験した。Zoomのミュートを外して、マスクを着用せず思いっきり笑ったり、泣いたりすることができる一時であった【資料5】。

3. おわりに

第40期日研究生が研修を受けていた期間は感染症の影響が拡大し、ほとんどの活動に制限があって、様々な

工夫を凝らしながら実施した。すべての授業はオンラインで実施され、日本人との交流も制限される中、いくつかの文化体験は対面で実施することができたこと、研究成果をレポートにまとめて研究成果発表が実施できたことは大きな成果だった。

第40期日研生の忘れられないシーンがある。対面で実施した落語入門に出席するために、8名の研修生が二列になって国際棟の前を行進している姿には喜びが溢れていた。まるで入学式に向かう小学生のように、わくわくしていて、興奮していて、緊張感が漂っていた。みんなの嬉しそうな声、緊張した表情はいまだに私の脳裏に焼き付いている。マスク越しではあった

が、やはり対面はいいなあとしみじみ思った瞬間だった。ソーシャルディスタンスは必要だったけど、教室で同じ空気を共有し、一緒に笑える喜びは感動的だった。

第40期の日研生にとっては、コロナ禍で始まり、コロナ禍で終わった研修期間だったが、一緒に学び成長した経験は一生の宝物になったと思う。名古屋大学で学んだ知識と経験を次のステップで生かして日本と世界をつなぐ架け橋になることを願う。そろそろ新型コロナウイルス感染症も終焉が見えてきた。今度は一緒に思い切って笑いあえる時に再会したい。

(許 明子)

【資料1】研究成果発表会当日の様子



(後列左側から、ドンさん、アジットさん、ヨウさん、アナさん、ヴィエリさん、ダニさん。
前列左側から TAの謝さん、コーディネーターの許明子、TAの西澤さん)

国際言語センター 日本語・日本文化研修生 第40期 研究成果発表会

- ◇ 日付: 2021年9月7日(火)
- ◇ 時刻: 10:00~15:00
- ◇ 場所: 国際棟 206号室 + Zoom ミーティング
- ◇ Zoom:

<https://zoom.us/j/98150298394?pwd=eVIwZCtqT05wWEVozZWlCMzN3RVgzZz09>
ミーティング ID: 981 5029 8394
パスコード: 4703

◇ 研究発表

時刻	名前	タイトル
10:00~10:30	ダニ ヌグラハ (インドネシア)	視覚障害者の電子情報アクセシビリティ —インターネットウェブサイトを中心に—
10:30~11:00	モハンマド・ロマドン (インドネシア)	インドネシアと日本の両国の交流事業の現在と今後の展望 —日本人の視点を通して—
11:00~11:30	ヨウ ガハイ (中国)	日本名古屋市における地下鉄空きの言語景観についての一考査 —公共サインの多言語化を中心に—
11:30~12:00	プラウイディヤ・ヴィエリ (インドネシア)	インドネシア人の日本語学習者による終助詞「ね」の理解の様相
昼休み		
13:00~13:30	コウ シツテン (中国)	『新論』から見る会沢正志斎の「中華」
13:30~14:00	アジット ギタレ (インド)	なぜ日本人は英語力が低いとされているのか
14:00~14:30	フランク・アナ・マリア・オル タンサ (ルーマニア)	日本語における配慮表現のルーマニア語との比較 —ルーマニア人日本語学習者の認識を通して—

- ◇ 総括: 許 明子

【資料3】 伝統文化特別講座「落語入門」案内ポスター

名古屋大学国際言語センター
日本語・日本文化研修コース
伝統文化特別講座



— 創作小唄から日本語を学ぶ —

落語入門

- ◆日時：2021年7月1日（木）
日研究生による小唄発表会 15：00～16：30
師匠による落語会 16：30～17：30
- ◆場所：名古屋大学 国際棟206号室
- ◆主催：名古屋大学国際言語センター
- ◆Zoom：

【資料4】 落語入門当日の様子



(左側から、ヨウさん、ヒエンさん、ダニさん、ヴィエリさん、コーディネーターの許明子、落語入門担当の宗林先生、ドンさん、アジットさん、アナさん)

【資料5】 狂言ワークショップ案内



・日時: 2021年7月26日 15:30~

・主催: 名古屋大学国際言語センター

・Zoom:

<https://us06web.zoom.us/j/81324288518?pwd=YXZQNDC0VUNlANFAeMFRQc0ZlNnc0aG9zZ00>



名古屋大学

【資料6】 第40期 日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集

名古屋大学学術機関リポジトリ

https://nagoya.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=controlnumber&search_type=2&q=1658197937322×tamp=1676279579.4079208